
みずはさんの場合

千鶴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

みずはさんの場合

【Zコード】

Z8071Z

【作者名】

千鶴

【あらすじ】

異世界トリップしちゃった彼女の場合、第六段。

女子高生の瑞葉さんは、常日頃異世界に行きたいと願っていました。ある日突然それは叶えられたわけですが、さて、彼女はどうなったのでしょうか。

(前書き)

あまり良くない表現（犯す等）が出ます。
ご注意ください。

いつか、こんなことがあればいいなー、なんて思っていた。

あたしは微温泉に浸かっているようなもどかしさを感じながら、毎日を惰性で生きていたから。

小説や漫画とかでよくあるような話で、正直、秘かにでも憧れていた。

毎日毎日、本当にわが身に起きてくれないものかと思っていた。いつ死んでもいいや、とまで想っていたのは、不謹慎でわかつてることで、確かになんだ。

けれども現実と妄想って、そりやそーなんだけじ、やっぱすべく違うものなんだよね。

そして今までの安穏とした生活が、何より幸せなことなんだって。恵まれていたのに、あっさり手放したいだなんて思っていたこと。それがどんなに傲慢だったか、身に染みて、ようやくわかった。まあ、今になってわかったところで、もう遅いんだけど。

「ご主人、終わりましたよお

「せうか、次はカーテンだな

「えー！ 昨日取り替えたばっかじゃないですかあ

へとへとになりつつも終了したことを主へと報告をすれば、休む間もなく次の指示が飛んだ。

本当に人使い荒い人だよ、まったく。
てゆーかカーテンまじ昨日死にそつになりながら洗いあげましたけ

どー！

大きな窓を覆う幾枚ものカーテンは、一人で洗おうと思つと一寸仕事になりかねない。

というか、むしろなつた。

そもそもがあたしがやるんじゃ時間かかるのもしじつがないし。

だってここは今まであつた便利な家電なんかひとつもない。手でせつせと洗いあげるしかないと知つた時、あたしがどれだけ絶望したことか。

「じゃあ窓を拭け」

「・・・わかりましたけどー、ちょっとは休憩させてくださいよおお

もー疲れたよー！

「・・・ミズハ」

そう弱音を吐けば、現在あたしを雇ってくれている「主人様から、すごい勢いで睨まれた。

綺麗な人が睨むと怖いんだから止めてよ、もー。

ほんと無駄に美形なんだからなあ。

「わかった、わっかりましたよう、そんな睨まないでくださいー

「無駄口を叩かずに働け。穀漬しになりたいか

「なりたいつちやあなりたいけどお、それを許してくれないじゃないですかあ

二ートは全人類の夢ですよ！

「わかつてゐるなら動け。動けなくなつたら追いだすからな」

「鬼畜う・・」

「何か言つたか」

「あらつと！」主人の眼が光つた。
やだもー、地獄耳！

「何も言つてませーん！お掃除行つてきまつすうー！」

「これ以上主に睨まれる前に、さつさと逃亡した。
ほんと怖い人だよ。」

その背後で、密やかに吐かれる悩ましげな溜息のことなど、当然あ
たしは知る由もない。

あたしがある日突然世界を越えたのは、今はもう2年前のこと。
学校行くのだるいーなんていいいながら歩いていたときだつた。
寝坊して友達に置いて行かれて、珍しく1人だつたんだよね。
それが幸か不幸かなんて今更どうでもいい。
来ちゃつたものは仕方ないし、過去のことは今更どうしようもない
し。

けど、そのきっかけは、今思い出しても相当あほらじこと思つんだ。

それは、あたしの足がたまたまそこにあつたマンホールを踏んだ、たつたそれだけ。

「あやつ！？」

当然返つてくると思っていた感触が、次の瞬間にはなくなつた。あるとthoughtた地面がなくなるつて相当びっくりするよね。

リアルに心臓が口から飛び出るかと思つたよ。

突然の浮遊感に、可愛げもない悲鳴が飛び出たのだつて仕方のないことだと思つ。

そもそもあたしつて可愛い女だしそうがないよねーつて、話された。

そんなこんなで、あたしはこの世界に落ちこちたつてわけ。

それから、正直あんま思い出したくないけど、けっこー悲惨な目に遭つた。

落ちた時には意識がなくなつてたから、地面に衝突したのかしてないのかわからないけど、とりあえず怪我がなかつたことだけは感謝すべきかなあ。

目が覚めた時には、どこだかわからんないけど、以前写真で見たオランダの田舎町みたいなところに居た。

さつぱり何が何だかわからんくて、泣くに泣けなかつた。

最初は言葉も通じなかつたしね。

チートとかのお約束がみーんななかつたのは、ちょっと困つた。だつて、あたしが混乱してる間に、人生初、人攫いに遭つちゃつたから。

そこから地味ーな転落人生ぽかつた。

見るからに脂きつたガマガエルみたいな成金親父に買われちゃつて。

奴隸みたいにってか、まさしく奴隸だね。

朝昼晩働かされて、たまーに気が向けば犯された。
初めてがガマガエルってのはまじ死ねると思ったなー。
いや、死ねなかつたけど。

なんか悔しくて。

それから、帰り方もわかんないしこんな辛いめにあつてまで生きて
る意味がいよいよわからなくなつて、でも死ねなかつたから、とり
あえず逃げることを考えた。

いやあ、人生あんなに必死になつて頭使つたの初めてです。

良く考えたら、こつち来てからやたら初めてづくしだつたんだよな
ーははは。

それはいいとして、必死に逃走方法とか、経路とか、どうしたらい
いか考えた。

館に住む人間のスケジュールを把握して自分の仕事の合間に逃げ道
探して、隙あらば金目の物を溜めこんで・・まあそこは微々たるも
んだったけど。

そうしてある夜に、ようやく機会を得て、あたしはそこから逃げ出
したんだ。

1年半そこに居ただけ、あたしは自分の忍耐力を誇りたいわけだけ
ど。

多分それだけそこに居て、その間あんま抵抗とかしなかつたから、
ガマガエルも油断したんだろうね。

最初は逃亡防止に鉄輪を脚に着けられてたし。

そんな感じで逃げたは良いけど、その後がまた困つたわけで。

言葉なんてろくにわかんないし勿論地理なんてさっぱり。

食べ物だつて持つてなくて、普段与えられてた食事も微々たるもの。
早々に、野垂死ぬのがオチだつて、考えたらあたしにだつてわかつ
た。

けどどうしてもあそこで死ぬのだけはやだつたんだから、しうが
ないよね。

逃げ出した田田、あたしは路上で倒れ込んだ。

歩く力が無くなつて、座る事も出来なくなつて、あたしはそこで初めて泣いたんだ。

何でこんな田にあつたんだひつて、思ひよねむつぱり。
確かに望んではいたけどさあ、他の世界に行きたいつて。
でも理由がわからんきや流石に理不尽だよねつて、思ひよね?
苦しくて痛くて気持ち悪くて、でもそれ以上に悲しくて寂しくてし
ょうがなかつた。

家族に会いたくて、友達にも会いたくて、こんななんでも好きな人が
居たんだよ。

告るなんてしんでもむりーなんて思つてたけど、こんな田に遭つて
もう一度と会えないんだつてわかつてたら、さつと特攻してたな
たし。

我ながら追い詰められなきややうない尻の重たさこ、ちよつと笑い
がこみ上げた。

でも、ちゃんと笑う力もなかつたあたしは、口角を緩めただけだつ
た。

そんでもそろそろダメかなつて、わかつたんだ。

死期を悟るつてゆーのかな、でもこれで楽になれるつて、ちよつと
ほつとした。

今までぬくぬく生きてきたふぬけこ、この奴隸生活は厳しそがまし
た。

疲れちやつたよつて、あたしは田を瞑ろうとしたんだつけ。
いや、瞑つて、もうこれでよならだつて意識を手放した。

それから。

何でか知らないけど、まだ今あたしはこうして生きてる。

今いるお館のただ一人の「ご主人さまに雇われて、ハウスキー・パーとして。

ハウスキー・パーって「いかメイド？」で「いか何でも屋さん？」

やつてること自体は、実は奴隸時代とそう変わらない。

でもあの頃はもっとくだらない雑用がメインだったから、ここに来てから初めてやる仕事も多い。

それなりに広さのある館には何故か「ご主人とあたししか居なくて、必然的に家事は全部あたしの仕事。

毎日が忙しくて目まぐるしくて、辛かつたころを思い出す暇もないのに救われたかなあ。

ま、けどやっぱ新しい「ご主人はやたら人使い荒いから、少しばかり増やして欲しいと思わないでもない。

そろそろ過労死しちゃいますよ、あたし。

貧弱な「よ現代人。

あ、あたし限定か。

「おい、さぼるな」

「やつてますよーー」

窓の桟を拭きながら、お茶を飲みながら優雅に後ろで監視しているご主人に口答え。

それが許されてるってことが、なんだかそれだけ気を許してくれてるみたいで、ちょっと嬉しい。

ちなみに今着ているのはメイド服みたいな仕着せで。

かつちりした布のそれは、長さが足首くらいまであって、ちょっと動きにくい。

なんせあたしは、元じょしーーせーー！

丈をひざ上にわざと改悪し、動きやすいよう勝手に変えっちゃっています。

だつて足首までつてなんかもによもにする。動きづらいや。
それをみたご主人に怒られたけど、これで外出ないからつて説き伏
したあたしグッジョブ。

仕事の能率アップにご協力してくんなきや困るのは「ご主人ですよ
てね。

「はいっしゅーりょーー夕飯の買い物に行つてきまーす」

「おい」

「わあかつてますよー着替えますつて」

「・・そんなことを言つて、この間も忘れてそのまま行つたひつ」

「いやん、」存知でしたか。うつかりしててー」

「うつかりじやない。わかつているんだうつな?」

ぎらつと眼光鋭く睨まれて、顔は笑顔を保つたまま、内心でうひい
と奇声をあげてしまつた。

だから怖いんだつてばあ。

けど、この世界つてほんとめんどうです。

いいじやん膝上くらい。足出すべりなんだつてーの。

そんなことを思つたけど、こちらの基準では女性は肌見せしないん
だとか。

中世とか基準がそんな感じー?止めてよねもー。

まああたしはただの雇われの身ですし、ご主人の評判を落としたい
わけじやない。

今の生活は、なかなかに気に入つてているのだ。

「じゃ、行つてきまーす

「・・・いや、まで、ミズハ。私も行く」

「えー？いいですよう、忙しいんですから仕事してくださーい」

「行く」

「・・・別にいいですけども

「玄関で待つてろ、すぐ行く」

「はあー」

丈の長いお仕着せに着替えて、出かけることを告げると、珍しくご主人までついてくるらしい。

どーいう風の吹きまわしー？

何か食べたいもんでもあつたかなあ。

ご主人はあたしを拾つてから、言葉もまともに喋れないあたしに生きる為の必要最低限の知識をくれた。

だから今はもう独りで生きていくことだつて可能になつた。

ご主人はそれを知つてゐはずなんだけど。

まあ、1人で行くより寂しくないからいつかあ。

「行くぞ」

「はーい。『ご主人、今日は何が食べたいですかー？』

「・・・別になんでもいい」

「そーゆーの一番困りますって言ひてるじゃないですかあ」

「ミズハが作るものだから、何でもいい。ダメか?」

「・・・わーお不意打ちー」

最近何が困るつて、こんな感じでご主人が『デレたりする』こと。
それこそ、『どー』いう風の吹きまわしなんでしょーか。
死にかけたとこ拾つてくれた恩人で、そつけなくも随所に気配りしてくれて、おまけに美形のご主人。

これで惚れなかつたら女じやねーよつてねえ。

しかしそれはこちらだけの都合だし、ご主人には関係ないことなんだ。

だから別に、ただの小間使いにご主人が優しい言葉をかけてくれる必要もない。

なのに、『ンデレつてこー』いうのかなあつてなんか最近良く思つようになつたのはどーしてかしら。
ご主人の言葉に思わず顔を赤くしちゃつあたり、あたしつてほんとわかりやすいよねえちくしょー。

それを見たご主人がにやりと悪戯成功したみたいに笑うのも、もーね、ツボなの。

ええいこの野郎、顔があげらんないじやないかー。

「ミズハ、腹が減つた。行くぞ」

「はあーい・・・」

楽しげな顔を即座に引っ込めて、ご主人はお店へ向かっていく。
ああ、あたしがこの人に勝てる日つて、多分一生来ないんだろーなー。

それでもいいから、もうちょっとお側に置いてくれるよ、あたしはただただ祈るしかないのであった。

始まりは突然で、悲惨な目に遭つてきたけど、今あたしは幸せです。

あたしの中では現在進行形の異世界トリップ。

これは、ご主人に拾われた、あたしこと瑞葉のお話。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8071z/>

みずはさんの場合

2011年12月25日20時47分発行